

Reach Within to Embrace Humanity



OSAKA ROTARY CLUB

Weekly Bulletin

創立 大正11年(1922)11月17日 ◆復刊週報第1号発行 昭和24年(1949)4月
 事務所 〒530-0005 大阪市北区中之島5-3-68 リーガロイヤルホテル内 Phone 06-6448-1121
 URL <http://www.osaka-rc.org/> E-mail secretariat@osaka-rc.org

例会 毎週金曜日 12時15分 リーガロイヤルホテル
 会長 水野 明人 幹事 松岡 一郎 クラブ会報委員長 横井 正彦

2011~12年度

国際ロータリー会長
 Kalyan Banerjee

国際ロータリー 第2660地区
 ガバナー 岡部 泰鑑

2011年9月16日(金) (第4,364回) 例会

第3の教育

一突き抜けた才能はここから生まれる

ラーネット・グローバルスクール代表
 神戸情報大学院大学学長

炭谷 俊樹氏

32~34歳のころ、デンマークに住んでいたときに娘が受けた教育に感銘を受けました。帰国後、阪神・淡路大震災がありました。それを期に、自分が本当にやりたいことは何かを改めて考えたとき、デンマークの教育が頭にあり、ラーネット・グローバルスクールを設立しました。きょうは、デンマークの話、ラーネット・グローバルスクールの話をしてしたいと思います。

◇デンマークの教育との出会い◇

私の長女がデンマーク時代に通っていた幼稚園は一言で言うと、子どもの特徴を認めていました。娘は当時、引っ込み思案。私も子どものころ同じような性格で、母親や先生から「もっと友達と遊びなさい」と言われていましたが、なかなかできませんでした。娘は最



初、突っ立って黙って見ていることが多かったそうです。ところが先生は「観察力がすばらしい」と。娘は見るところから始め、観察し、動く。動き始めたらいろいろなことができる。と、認めていただいた。

一方、動き回って成長する子どももいる。日本だと、動き回っている子には「おとなしくしなさい」、じっとしている子には「もっと動きなさい」と言ってしまうがちですが、デンマークの幼稚園は、じっとしている娘には、「観察力がすばらしい」、動き回る子には、「行動力がすばらしい」と、認めることから入る。すると非常に自信がつき、自分から挑戦できる性格になります。

娘の場合も最初は友達ができなかったのですが、半年後は皆に声をかけている。友達と遊ぶ約束をして帰ってくる。私は小学4年生

10月7日(金) (第4,366回例会)の卓話

職業奉仕月間記念例会

「出前授業に参加して思うこと」

会員 堀 正二君「伝えたいのは“志”」

会員 四方 修君「考えさせられる出前授業」

会員 庄野晋吉君「次世代を担う若者に何かを伝えたい」

(プログラム担当 職業奉仕委員会)

例会後クラブフォーラム(職業奉仕部門)開催

次回10月14日(金)の卓話

米山月間記念例会

本(2011~12)年度

当クラブ受け入れ米山奨学生

金 雪美さん

「私の夢」

四つのテスト。Ⅰ 真実かどうか？ Ⅱ みんなに公正か？ Ⅲ 好意と友情を深めるか？ Ⅳ みんなのためになるかどうか？

くらいまで自分を発揮できませんでしたが、娘は積極的になりました。帰国後も、音楽をやりたい、絵を描きたい、勉強もしたい、と。今は21歳でカナダに留学しています。生物専攻ですが、副専攻は歴史。とにかく非常に生き生きと育ってくれた。これがデンマークの教育に対する私の原体験です。

◇ 日本の教育との比較 ◇

日本はテストなど競争は大事、それで子どもは頑張るとの考えがあります。人の能力には優劣や得意・苦手があり、学ぶ内容は文部科学省が決め、授業は先生が教える。最近は少し薄れているかもしれませんが、「いい学校、いい会社に行ければ幸せになれる」と考えがちです。社会問題、何か身近な問題が起こったときに対する態度でも、教育なら「文科省や学校の先生が何とかする」となるのが、日本の特徴です。

デンマークは違うやり方です。例えば、小中学校のテストは法律で禁じています。なぜか。これは私が実際にスクールを始めてわかったのですが、点が高い子はいいが、低いと苦手意識を持ってしまう。特に小さい子は、最初で悪い点になると、先へ動きづらくなる。しかし、苦手意識をつくらないことによって苦手科目もできません。学ぶこと、成長することに意欲的になる。そうなってしまえば、後は競争のあるところに出て、自信を持っていろいろなことに挑戦できます。

学校に関してはかなり自由度があります。学ぶ内容は学校ごとに決めていい。先生からの一方通行ではなく、先生と子ども同士の対話が豊富です。また、社会問題に対しては、誰かがいい社会をつくってくれるのではなく、自分たちでいい社会をつくっていくという意識がある。問題があったときに自分たちで議論して、どんな解決策があるか議論する。その結果、デンマークは「幸福度」というランキングで1位です。自分たちで住みやすい社会をつくっていくことで幸せ感がある、と。

私は日本人です。デンマーク礼賛、日本が悪いとは思っておりませんが、このデンマークでやっていることが参考になるのではと考え、帰国後、新しい教育をやりとうということにつながりました。

◇ 第 3 の 教 育 ◇

子どもに勉強を強制させるのを、私は「第1の教育」と呼んでいます。それが、ゆとり教育でもう少し個性を認めようとなりましたが、子どもに任せると勝手なことをやり始める。現場の先生も戸惑いがあり、結果的に放任になってしまった。これを「第2」とします。デンマークはどちらでもない。子ども自身が何をやりたいかを考えて自立的に学び、先生が支援する。それを私は「第3の教育」と呼んでいます。ラーンネットの場合、この「第3の教育」を重視しています。

今、六甲山の標高850メートルのところに学校があり、自然の中で23人の生徒が学んでいます。できるだけ教科書ではなく、身の回りの現実、地域の社会や自然を題材に学ぶ。基礎学力をおろそかにしていいわけではなく、しっかり身につけ、それを実際の自分たちの社会に応用していく。テストによる序列化はしませんが、一人ひとりの子どもを観察をし、今何ができている、できていないということ把握して指導しています。

初期の入学生は大学生になりました。コンピューターが得意な子どもがプログラミングの大会に出たり、スポーツで頑張ってウエイトリフティングで大活躍している子もいれば、イルカが大好きだった子が、その分野で研究を進めています。

知識や教育は、いい学校、いい会社に行くためではなく、自分の人生や社会を豊かにするためにあると思っています。競争を全面否定するわけではありません。ただ、現代社会は余りにもそれに偏り過ぎています。人よりも収入が高いとか、いい場所に住んでいるではなく、もっと本質的に、自分自身を磨いて、人間力も磨いて、技術も磨いて、社会に貢献するような生き方をしてほしい、と思い活動をしています。(映像使用)

卓話者紹介：1960年神戸生まれ。東京大学大学院物理学科修士課程修了。マッキンゼーで10年間、日本及び北欧企業のコンサルティングに従事。'98年六甲山で「ラーンネット・グローバルスクール」創立。大前研一氏とビジネス・ブレイクスクール大学院大学設立。'10年から神戸情報大学院大学学長